

## 大学生の愛着スタイルと幼少期の親子関係に関する研究

鈴木 昌喜\*, 塚野 弘明\*\*

(2017年2月15日受理)

Yoshiyuki SUZUKI and Hiroaki TSUKANO

### A Study on Parent-child Relationship in Childhood and the Attachment Style of College Students

#### 1. 問題と目的

現在、学校現場では、授業中に立って歩く等落ち着きがない子ども、自分の感情をうまくコントロールできずにキレる子どもが増えている。大河原(2015)によると、このような子どもたちの行動の背景には、大きく分けて二つの要因があると考えられているという。一つは、先天的な要因である「発達障害」である。もう一つは、後天的な「愛着障害」である。学校現場において、発達障害がよく問題とされる昨今、落ち着きのない子どもたちはほとんどの場合が発達障害と医師から診断され、特別支援学級に無理やり入れられたり、投薬治療で状態を落ち着かせたりというような方法で対処されてきた。しかし、例えば、落ち着きのない子どもの中には、学校ではそのような姿であっても、家ではすごく落ち着いており、親の言うことを素直に聞く、いわゆる「よい子」である子どももいる。この場合、発達障害とは言えない。なぜなら、発達障害であれば、学校では落ち着きのない子、家ではよい子というような区別がつけられないからである。そして、このような場合この子は愛着障害の疑いがあると考えられる。愛着障害とは、乳幼児期に長期にわたって虐待やネグレクト、一貫性のない対応、選択的な対応を受けたことにより、保護者との安定した愛着が絶たれたことで引き起こされる障害である。岡

田(2011)によると、一般の児童を対象に行った研究において、実の親のもとで育てられている子どもでも、「安定型の愛着を示すのは、およそ三分の二で、残りの三分の一もの子どもが不安定型の愛着を示す」ことが分かっており、愛着障害と呼ぶほど重度ではないが、愛着に問題を抱えた子どもがかなりの割合存在するという。また、「成人でも、三分の一くらいの方が不安定型の愛着スタイルをもち、対人関係において困難を感じやすかったり、不安やうつなどの精神的な問題を抱えやすくなる。」と述べている。本研究においては、大学生の愛着スタイルに着目すると共に、一般的な子どもの問題や教育との関連を見て行きたい。

これまでも大学生の愛着や愛着スタイルに焦点を当てた研究は多くあり、愛着スタイルと恋愛イメージとの関係、友人関係との関連等といった、大学生の現在の対人関係傾向との関連があることは明らかになっている。また、回想法によって幼児期の親子関係との関連を見る研究も多くなされ、それらの研究結果によって、幼い頃の親子関係(特に母親との関係)が大学生の愛着スタイルに影響を与えていることもすでに明らかになっている。しかし、これまで行われてきた大学生の愛着スタイルと幼い頃の親子関係との関連を扱った研究では、愛着スタイルに影響を与える大まかな要因(例えば、親との親密性など)を明らかにす

\*平泉町立平泉小学校教諭, \*\*岩手大学教育学部学校教育科

るものや、親子関係のある側面（例えば、親との身体的接触など）を取り上げて行うものが多く、親子関係の側面を多面的、具体的に捉えた研究はない。そこで、本研究では、大学生の愛着スタイルを安定型、不安型、回避型の3つのタイプに分け、親子関係の8つの側面（被拒絶感、積極的回避、心理的侵入、厳しいしつけ、両親間不一致、達成要求、被受容感、情緒的接近）との関連を見ていく。さらに、子どもの性別、養育者の性別にも目を向け、その関係や一致点、相違点についても見ていきたい。こうした研究結果を踏まえて、安定した愛着スタイルを確立するために大切な幼少期の親との関わり、また反対に不安定な愛着スタイルに影響を与える幼少期の親子関係の側面について明らかにすると共に、教員が児童の親子関係において重要視しなければいけない点を指摘したり、子どもとの関わりに困難を感じている親への援助の示唆を得たい。

## 2. 愛着と愛着スタイル

愛着とは、ある人物が特定の他者との間に結ぶ情緒的な絆をいう。アタッチメント (attachment) とも言われる。子どもが母親（あるいは母親に代わる人物）との間に結ぶ絆として論じられることが多い。愛着は、子どもが母親に接近し、接近した状態を維持しようとする行動（愛着行動）として現れる。子どもは乳幼児期に最初の愛着対象である母親に対して愛着を形成する。そして、そこで形づくられた他者に対する安全感を基盤に子どもはその後様々な対象と出会い、ふさわしい形で愛着を形成していく。つまり、愛着は必ずしも母親のみを対象とするのではなく、月齢が増加するにしたがって、父親、兄弟、祖父母などの家族、友人、恋人などへと、その対象を広げていく。また、母親との愛着は乳幼児期を過ぎると消え去るのではなく、青年期、成人期以降も持続し、対人関係を築く基盤となる。

愛着という概念を示したのは、英国の児童精神科医であり、精神分析学を学んだジョン・ボウルビー (John Bowlby) である。ボウルビーの愛着

に関する研究は、児童精神科医として初期に出会った非行少年たちの背景に幼少期における長期母子分離経験があったことの発見や、1940～1950年代（第二次世界大戦直後）における多くの研究者から報告されたホスピタリズムの問題に遭遇する中で、「養育者との長期分離や喪失が、いかに幼い子どもの心身の発達に多大なダメージを与えるか」を目の当たりにしたことに端を発する。その後研究が進み、ボウルビーの愛着理論は1969年に明確に定式化され、発達心理学の分野で多くの研究がなされてきた。ボウルビーの研究は、その後、共同研究者であったエインスワース (Mary Ainsworth) へと受け継がれた。エインスワースは、ボウルビーの愛着理論を基盤に、ストレンジ・シチュエーション法という観察法を考案した。この方法を用い、母親との“分離-再開”場面において子どもがどのような行動をとるかで三つの愛着パターン（安定型、回避型、両極型）に分けた。それぞれの愛着パターンの特徴を次に示した。

- (1) 安定型…養育者に安定した愛着を示す。特に母親との再会時において自ら近接・接近を求める行動や再会の喜びを表す情動が認められ、新奇性不安や分離ストレスを母親の存在によって緩和・安定化することができる。また、分離前の場面では、母親を安全基地として活発な探索行動を展開できる。
- (2) 回避型…養育者に愛着を示さない。母親にまるで無関心であるかのごとく振る舞い、分離抵抗や新奇性不安もさほど示さずに、再会時にはむしろ母親を回避・無視する傾向が認められる。
- (3) 両極型…母親にすべての注意と関心が奪われるがゆえに、探索行動も非常に乏しく、分離時も激しく泣き、その不安定さがまったく回復しない間の母親との再会に際しては強く接触を求めると同時に激しい怒りと抵抗行動（母親に攻撃的な行動を向けたり、激しくむざがり続ける）を顕わに示す。

エインスワースのストレンジ・シチュエーション法により、母親との関わりにおける、愛着の傾

向を判断できるようになった。

### 第3節 愛着スタイルとは

愛着スタイルとは、人間が対人関係を形成する場面でみられる心理的な傾向（愛着行動の様式）のことである。岡田（2011）によると、幼い頃の愛着スタイルは、まだ完全に確立したものではなく、関わる対象によって愛着パターンが異なることも多く、また養育者が変わったり、同じ養育者でも、子どもへの接し方が変わったりすることでも変化するという。そのため、この時期の愛着の傾向は、愛着スタイルとは言わず、愛着パターンと言って区別をする。つまり、愛着スタイルは、親をはじめ、子どもにとって重要な他者との間で愛着パターンが積み重ねられていくうちに、その人固有の愛着パターンが次第に明確になり、確立されていくものである。したがって、子どもにとって愛着対象となる他者の関わり方や愛着スタイルが、子どもの愛着の傾向に与える影響は大きい。一般的に、両親と安定した愛着関係をもつことができれば、安定した愛着スタイルが育まれやすい。しかし、親との関係が不安定な場合でも、それ以外の大人や仲間（友達、恋人など）に対する愛着によって補われ、安定した愛着スタイルが育つこともある。

成人の愛着スタイルは、安定型（自律型）、不安型（とらわれ型）、回避型（愛着軽視型）の三つに大きく分けられる。それぞれの愛着スタイルの特徴は以下の通りである。

(1) 安定型…自分が愛着し、信頼している人が、自分をいつまでも愛し続けてくれることを確信している。愛情を失ってしまう、嫌われてしまうなどと思悩むことがない。自分が困ったときや助けを求めているときには、それに必ず応えてくれると信じているため、気軽に相談したり、助けを求めたりすることができる。また、安定型の人は、率直であり、前向きである。人の反応を肯定的に捉え、自分を否定している、蔑んでいるなどと誤解することがない。

(2) 不安型…「人に受け入れられるかどうか」「人に嫌われていないかどうか」を気にする。自分

が行動をとったときに、少しでも相手の反応が悪いと、相手に嫌われているのではないかと不安になってしまう。また、「愛されたい」「受け入れられたい」「認めてもらいたい」という気持ちが強いため、拒絶されたり、見捨てられたりすることに対して敏感である。他人を頼りたい、助けを求めたいという気持ちはあるが、自分がそうすることで相手に嫌われたり、相手が迷惑に感じてしまったりするのではないかと不安に感じる。

(3) 回避型…距離をおいた対人関係を好む。親しい関係や情緒的な共有を心地よいとは感じず、むしろ重荷に感じやすい。そのため、親密さを回避しようとし、心理的にも物理的にも、距離をおこうとする。人に依存もしなければ、人から依存されることもなく、自立自存の状態を最良とみなす。そして、他人に迷惑をかけないことが大事であると、自己責任を重視する。また、回避型の人は、人とぶつかり合ったりする状況が苦手で、そうした状況に陥りそうになると、自分から身を引くことで事態の収拾を図ろうとする。

これらの愛着スタイルはそれぞれ、第2節で述べた三つの愛着パターンと対応する。安定型と安定型、回避型と回避型、両極型と不安型である。乳児の愛着パターンと成人の愛着スタイルをこのように結び付けて見ると、それぞれの愛着パターン、愛着スタイルにおいて、乳児期の母親への行動の傾向と成人期の対人関係の傾向がよく似ていることが分かる。

## 3. 調査

### 3.1 目的

大学生の現在の愛着スタイルと、幼少期を含めた、これまでの父親、母親との関係とに、どのような関連があるのか検討する。また、愛着スタイルに強く影響を与える、親子関係の側面について検討する。

### 3. 2 方法

#### 【調査対象者】

大学生1～4年生145名、大学院生1～2年生3名の計148名を対象に調査を実施した。そのうち回答に不備のあった1名を除き、最終的に147名（男性61名、女性86名）を分析対象とした。

#### 【調査手続】

大学の授業中に学生の同意を得て、調査を実施した。授業終了20分前に質問紙を配布し、質問紙についての説明をした後、約20分間で調査対象者に回答を求め、授業終了時に質問紙を回収した。また、自分の知り合いにも協力を要請し、時間を制限せずに、回答を求めた。質問紙は後日回収した。調査実施時期は2015年12月だった。

#### 【質問紙の構成】

##### (1) 基本的属性

調査対象者の学年、性別についての質問

##### (2) 性格に関する調査

岡田(2011)が「親密な対人関係体験尺度(ECR)」をもとに作成した、45項目からなる愛着スタイル診断テストを使用した。調査対象者には、対人関係における過去数年間の自分の傾向を思い出してもらいながら、各項目について、「あてはまる」「あてはまらない」「どちらとも言えない」の3段階で回答を求めた。このテストは、愛着回避、愛着不安、愛着安定と関連の高い項目に、どれだけ該当するかによって愛着のタイプ(安定型、安定-不安型、安定-回避型、不安型、不安-安定型、回避型、回避-安定型、恐れ-回避型)を判定するものである。

##### (3) 親子関係に関する調査

「親子関係診断検査(FDT)」(東、柏木、繁多、唐沢(2002))の子ども用(中・高校生用)を使用した。この検査は、8尺度(被拒絶感、積極的回避、心理的侵入、厳しいしつけ、両親間不一致、達成要求、被受容感、情緒的接近)60項目から構成されており、母親、父親それぞれ

との親子関係を、同一の60項目を用いて測定するものである。

本研究では、幼い頃の親子関係を主眼に置いているが、「幼い頃(幼児期から児童期初期まで)のこと」と限定することで生じる、回想法による答えにくさの問題を考慮し、調査対象者には、幼い頃のことも含めた、現在に至るまでの母親、父親との関係を尋ねた。各項目に対して、「まったくあてはまらない(1点)」から「よくあてはまる(5点)」の5段階で回答を求めた。尺度ごとの説明は以下の通りである。

- ・尺度1『被拒絶感』……10項目  
子どもが、自分は両親から拒絶されていると思っている程度。
- ・尺度2『積極的回避』……10項目  
子どもの方から親との接触を避けたり、関わりをできるだけもたないようにしている程度。
- ・尺度3『心理的侵入』……5項目  
子どもが、自分のプライバシーを親が侵害していると感じている程度。
- ・尺度4『厳しいしつけ』……5項目  
子どもが、親のしつけを厳しいものだと認知している程度。
- ・尺度5『両親間不一致』……5項目  
養育および教育に関する両親の考えの違いや、相互の不満を子どもが認知している程度。
- ・尺度6『達成要求』……5項目  
子どもが、親からプレッシャーをかけられていると思っている程度。
- ・尺度7『被受容感』……10項目  
親が自分を信頼し、受容してくれていると子どもが思っている程度。
- ・尺度8『情緒的接近』……10項目  
子どもが、親を情緒的に受容している程度。

### 3. 3 結果

#### (1) 基本的属性

調査対象者の学年と性別をTable 1に示す。

Table 1. 調査対象者の学年と性別

	1年生	2年生	3年生	4年生	院1年生	院2年生
男性	3人	25人	12人	21人	0人	0人
女性	3人	47人	14人	19人	1人	2人
合計	6人	72人	26人	40人	1人	2人

(2) 性格に関する調査

本研究では、調査対象者を安定型、不安型、回避型の3つのタイプに分けた。岡田(2011)の愛着スタイル診断テストの判定方法では、判定基準に従って調査対象者を8つのタイプ(安定型、安定-不安型、安定回避型、不安型、不安-安定型、回避型、回避-安定型、恐れ-不安型)に分けるのであるが、この判定方法で調査対象者を判定すると、一人に対して複数のタイプが出てきてしまい、研究に不都合が生じる。そのため本研究では、集計表に従って、調査対象者の「安定型愛着スコア」、「不安型愛着スコア」、「回避型愛着スコア」の合計得点をそれぞれ出し、一番得点の高い愛着スコアをその調査対象者の愛着のタイプとしてまとめた。なお、複数の愛着スコアが同得点を示した場合は、同様の愛着スコアが同得点であった調査対象者をまとめ、同得点だった愛着スコアの数で調査対象者の人数を割り、それぞれの愛着のタイプの人数に均等に加えた。

Table 2が、その結果である。男女とも安定型が最も多く、次いで不安型、回避型の順で多いという結果となった。また、男女それぞれの全体に占める割合でみると、不安型は男性13.6%、女性17.9%で女性の方が高いのに対して、回避型は男性11.9%、女性8.3%で男性の方が高くなった。

Table 2. 調査対象者の性格タイプ

	男性	女性
安定型	44人	62人
不安型	8人	15人
回避型	7人	7人

(3) 親子関係に関する調査

「親子関係診断検査(FDT)」(東、柏木、繁多、唐沢(2002))の分類方法に従い、各調査対象者の尺度ごとの合計得点から尺度ごとのパーセントイルを導き出し、調査対象者をA型からE型まで分類した。

- ・A型…親との関係が安定している。基本的に親から愛され大事にされていると思っており、いざというときに親は必ず助けてくれると思っている。
- ・B型…A型同様、親との関係は安定しているが、さまざまなタイプが含まれる。
- ・C型…親からは完全に拒否されていると感じていて、みずからも情緒的にも行動の面でも親を激しく拒否している。
- ・D型…C型ほどではないが、親との関係が不安定である。親に対する見方や行動は、かなりネガティブである。
- ・E型…不安定な親子関係のタイプの中でも、特異的なパターンである。親から拒絶されているという感覚も、親から受容されているという感覚もなく、また親を拒絶しようとする感情も、親との情緒的な結びつきをもととする感情もない。対人感情が著しく抑圧されており、無感動という状況に陥っていると考えられる。

Table 3に、男性、女性それぞれの、母親、父親との関係のタイプの人数を示した。どの組合せにおいても、安定的な親子関係を表すA型の人数が最も多く、特異的なタイプであるE型には該当する者はいなかった。不安定な親子関係を表すC型、D型をみると、どの組合せにも



## ①女性の母親との関係

安定型では、『被拒絶感』( $r=-.38, p<.01$ )、『積極的回避』( $r=-.42, p<.01$ )、『両親間不一致』( $r=-.51, p<.01$ )との間に有意な負の相関が見られ、『被受容感』( $r=.52, p<.01$ )、『情緒的接近』( $r=.56, p<.01$ )との間に有意な正の相関が見られた。それに対して不安型では、『被拒絶感』( $r=.23, p<.05$ )や『両親間不一致』( $r=.41, p<.01$ )との間において有意な正の相関が見られ、『被受容感』( $r=-.35, p<.01$ )、『情緒的接近』( $r=-.34, p<.01$ )との間には有意な負の相関が見られた。また回避型では、不安型同様、『被受容感』( $r=-.23, p<.05$ )、『情緒的接近』( $r=-.23, p<.05$ )との間に有意な負の相関は見られたが、『被拒絶感』や『両親間不一致』との間に有意な相関は見られなかった。

## ②女性の父親との関係

安定型では、『被拒絶感』( $r=-.44, p<.01$ )、『積極的回避』( $r=-.46, p<.01$ )、『両親間不一致』( $r=-.44, p<.01$ )との間に有意な負の相関が見られ、『被受容感』( $r=.40, p<.01$ )、『情緒的接近』( $r=.45, p<.01$ )との間に有意な正の相関が見られた。対して不安型では、『被拒絶感』( $r=.29, p<.01$ )、『積極的回避』( $r=.27, p<.05$ )、『両親間不一致』( $r=.37, p<.01$ )との間に有意な正の相関が見られ、『被受容感』( $r=-.28, p<.01$ )、『情緒的接近』( $r=-.28, p<.01$ )との間に有意な負の相関が見られた。また回避型では、『被受容感』( $r=-.28, p<.01$ )、『情緒的接近』( $r=-.25, p<.05$ )との間に有意な負の相関が見られた。

## ③男性の母親との関係

安定型では、『被拒絶感』( $r=-.47, p<.01$ )、『積極的回避』( $r=-.34, p<.01$ )との間において有意な負の相関が見られ、『被受容感』( $r=.48, p<.01$ )、『情緒的接近』( $r=.40, p<.01$ )との間において有意な正の相関が見られた。また不安型では、『達成要求』( $r=.29, p<.05$ )との間に有意な正の相関が見られた。回避型では、『被拒絶感』( $r=.48, p<.01$ )、『積極的回避』( $r=.49, p<.01$ )との間に有意な正の相関が、『被受容感』( $r=-$

$.33, p<.01$ )、『情緒的接近』( $r=-.59, p<.01$ )との間に有意な負の相関が見られた。

## ④男性の父親との関係

安定型では、『情緒的接近』( $r=.25, p<.05$ )との間に有意な正の相関が見られた。不安型では、『達成要求』( $r=.31, p<.05$ )との間に有意な正の相関が見られた。回避型では、『情緒的接近』( $r=-.29, p<.05$ )との間に有意な負の相関が見られた。

## 4. 考察

調査 I の結果から、大学生の愛着スタイルに影響を与える、また愛着スタイルと関連の強い、過去の母親、父親との関係の側面が明らかになった。それぞれの組み合わせごとに考察をしていく。

## ①女性の母親との関係

安定型の結果において、『被拒絶感』、『積極的回避』との間で負の相関が、また『被受容感』、『情緒的接近』との間で正の相関が高いことから、親から情緒的に受け止めてもらう経験や、自分は親から信頼されている、愛されているという実感が、子どもの安定した愛着スタイルを形づくっていることが分かる。それと同時に、親から好かれていないと感じることや、親との接触をあえて避け、できるだけ関わらないようにしようとする子どもの心情は、安定した愛着スタイルにネガティブな影響を与えることが分かった。また、不安型、回避型で『被受容感』、『情緒的接近』との間で負の相関が高くなったことから、親から情緒的に受け止めてもらう経験が少ないなど、不安定な親子関係は不安定な愛着スタイル（不安型、回避型）に影響することが分かった。これらのことは、多くの文献や論文でも指摘されているため、このような結果が出るであろうことは推測できた。それよりもここで特筆すべきは、安定型で『両親間不一致』との間の負の相関が高くなったことであろう。このことから、養育に対する両親の意見が食い違っていたり、母親から父親（父親から母親）への不満があったりすること、またそこか

ら生じる親の不仲が、安定した愛着スタイルに負の影響をもたらすということが明らかになった。また、この『両親間不一致』は不安型との間において、正の相関が高い。つまり、子どもが親の不仲を認知し、養育に対する両親の意見が合わないのは、自分のせいではないかと不安に感じることで、「親の機嫌を損ねないように自分が頑張らなければ」という思いが生まれ、相手の機嫌をとろうと顔をうかがったり、嫌われないように努めようとしたりするような不安型愛着の傾向が強まるのではないだろうか。

#### ②女性の父親との関係

母親との関係と同じような結果となったが、不安型において、『被拒絶感』、『積極的回避』との間に正の高い相関があることは、注目すべきであろう。このことから、女性は父親との関係の中で特に、親から認められていないと敏感に感じたり、あえて接触を避けようとしたりすることで、不安型愛着を持つことが分かる。女性にとって父親は異性の親と言うこともあり、思春期などとの関係で接触を避ける時期があることも当然なのではあるが、その時期以前または以降も、父親との間にこのような親子関係があるとすれば、それは不安型愛着の傾向を強める親子関係の側面となるであろう。

#### ③男性の母親との関係

安定型については、女性の親子関係と同じように、『被拒絶感』、『積極的回避』との間で高い負の相関が見られ、『被受容感』、『情緒的接近』との間で高い正の相関が見られた。男性の母親との関係においても、安定した親子関係の重要性がうかがえる。また回避型においては、『被受容感』、『情緒的接近』との間に高い負の相関が見られることは女性の場合と同じであるが、男性の母親との関係の場合は、『被拒絶感』、『積極的回避』との間にも高い相関が見られる。このことから、男性の場合、母親からの情緒的受け止めが少ないことだけでなく、母親から拒絶される経験や母親をあえて避けようとする気持ちが、回避型愛着の傾向を生むことが分かる。

自分の一番身近にいる母親から情緒的な受け止めや共感が少ないために、他人への頼り方、甘え方が分からず、回避型の特徴でもある、親密さを求めず、自立自存を重視するようになるのかもしれない。そして、不安型では、『達成要求』との間に高い正の相関が見られたことから、親から「よい成績をとりなさい」や「よい学校にはいりなさい」など、プレッシャーをかけられることで不安型の愛着を示すことがあることが見てとれる。このような親からのプレッシャーは、幼児期にかけられることは少ないが、習い事などを行っている子どもなら十分に考えられることである。親からの達成要求が強まることで、それが自分は親から愛されていない、認められていないという気持ちを生み出し、そのような親子関係の中で、子どもは拒絶や見捨てられに対して敏感になってしまうのではないか。また、社会全体の考え方として今もある「男なのだからしっかりしなくてははいけない」という考え方に基づいて、親から根拠のない過剰な期待をかけられることで、委縮してしまうことも、このような結果の背景にあると考えられる。

#### ④男性の父親との関係

結果を見て一番に考えることは、相関が高い親子関係の側面が少ないことである。有意な相関として認められるのは、安定型と『情緒的接近』との間の正の相関、不安型と『達成要求』との正の相関、否定型と『情緒的接近』との間の負の相関のみである。このことから、男性は父親との関係において、愛着スタイルにあまり影響を受けないことが分かる。男性において、子どもと父親の間には、お互いのことをあまり干渉し合わなかったり、干渉されたとしても、あまり気に留めなかったりするような関係が成立していることが考えられる。また、不安型と『達成要求』との間に正の相関が高いことから、父親との関係においても、親から子への期待やプレッシャーが大きいことが、子どもの不安型愛着の傾向に与える影響は大きいと言える。

これまで述べてきたことから、大きく3つの

ことが分かる。

第1点目は、子どもが安定型愛着を持つためには、親が子に対して、愛情を持って接することで、子が、親から好かれている、愛されているという実感を持てるようにする必要があることである。また親が、子の反応に対して、決して拒絶することなく、その反応を受けとめた上で、子の反応の裏にある気持ちに共感してあげること、子の気持ちを十分に理解してあげることも重要である。

2点目は、女性において、両親間の考えや思いの食い違いが、愛着スタイルに与える影響は大きいということである。両親が互いを尊重し合い、子の養育に対して同じような考え方を持って子に接することで、子どもは安定した愛着を持つことができる。また反対に、両親の仲がうまくいっていないと、子どもの不安型愛着スタイルに影響する。

3点目は、男性において、親からの達成要求が、子の不安型愛着に大きな影響を与えることである。親の子に対するプレッシャーが強いと、子は対人関係において、「自分は周りから受け入れられていないのではないかと不安に感じたり、他人に嫌われないようにしようとしたりするような傾向を示すことが明らかになった。

ただ、本研究において、調査対象者が大学生、大学院生（大学まで通うことが可能なだけの家庭環境がある）ということもあり、性格に関する調査、親子関係に関する調査の結果からも分かるように、安定した愛着スタイルや親子関係をもつ者が多い等、サンプルが偏っている可能性がある。また、回想法の問題で、調査において、親子関係の対象時期を幼少期に絞らなかったため、本調査における結果が、すべて幼少期においても言えることとは限らない。

## 5. 総合的考察

調査Ⅰ、調査Ⅱの結果から、大学生の愛着スタイルに影響を与えていると思われる、幼少期の親子関係の側面が少しずつ見えてきた。安定した親

子関係は、安定した愛着スタイル（安定型）を、また不安定な親子関係は、不安定な愛着スタイル（不安型、回避型）を強めることが本研究を通して明らかにすることができた。

調査Ⅰにより、安定型愛着スタイルを強める親子関係の側面は、親からの被受容感、親子間の情緒的接近であることが分かった。このことに関しては、Prior&Glaser（2008）も、「安定した（安定型）愛着を持っているということは、愛着対象が利用可能であり、（子どもの）近接性を求める気持ちに対して敏感にかつよい意図を持って応答してくれ、もし愛着システムが非常に活性化されたときには、慰めや安心感への欲求に、同じように応答してくれるだろうという自信を持っているということ」と述べており、親との近接性や親の応答性、つまり、親との接近、親からの被受容感の重要性が分かる。また調査Ⅰの結果から、反対に、親からの被拒絶感、積極的回避は、負の影響をもたらすことも明らかになった。では、親からの被受容感、親子間の情緒的接近はどのような親子関係で成立するのか。その答えは、調査Ⅱの結果から明らかになった。泣いているときに慰めてくれたり、嬉しいことがあると、一緒に喜んでくれたりするなど、親の応答性や感受性の敏感さが、子どもの被受容感や親との情緒的接近に影響を与えている。また、抱っこやおんぶなどの身体接触や親がいつでも相談に乗ってくれる、話を聞いてくれるという安心感が、安定型愛着を強めるのである。

一方不安型においては、調査Ⅰにおいて、安定型でみられたような、いわゆる、安定した親子関係の側面との間では負の相関が見られ、代わりに被拒絶感や積極的回避などの不安定な親子関係との間の正の相関が高くなった。このことから、親から愛されていないと感じることや、親との接触を回避しようとするのが、不安型愛着スタイルに影響することが分かる。また、女性における両親間不一致、男性における達成要求が、不安型愛着スタイルに大きな影響を与えることが分かった。調査Ⅱの結果も考慮に入れると、男性におい

ては、あまりに親から子への期待が強すぎると、それが子へのプレッシャーや子の負担になってしまい、そこから親から認められていないという不安につながる。女性においては、両親の意見の食い違いや、一方の親からもう一方の親への好ましくない態度が、不安型愛着の傾向を強める。ただ、女性の場合、両親間の不一致は安定型との負の相関も高いため、両親間でお互いを尊重し合う関係ができ、それを子どもが感じ取れば、安定型愛着傾向に良い影響を与えられと考えられる。不安型の結果は、子どもの性別によって、重要視する親子関係が違ふということを示してくれた。

また回避型においては、調査Ⅰよりも調査Ⅱによって、有益な示唆が得られた。それは、親の干渉や無関心が回避型愛着スタイルに影響を与えるということである。親との関わりが持てないことで、愛着の絆を結ぶことができず、愛着関係や対人関係を軽視するという回避型愛着の傾向を持つことになると考えられる。また、親子関係の側面と言えるかどうかは定かではないが、何らかの事情により養育者が次々と交替することも、回避型愛着に負の影響をもたらすことが分かった。この場合も、特定された対象との間に愛着を結ぶことができないためと考えられる。ただ、調査Ⅰの結果より、男性と父親との間にあまり相関が見られなかったことが挙げられる。このことから、男性は、同性の親である父親との関係を重要視していないことが見てとれる。

本研究においては、大学生を対象としたが、愛着パターンや愛着スタイルは、乳幼児期に母親との間で成立した愛着関係に基盤があり、成長過程において著しく変化することはないという考え、また親子関係の基本的な部分（養育態度の根底にある考え方や親の接し方）は、幼少期と成人期においても大きく変わることはないという考えから、本研究の結果は、児童期においても言えることであると考えられる。そのため、小学校教育において、教師として、児童の父親、母親との関係をみる際のポイントとしたり、子の養育に困難を感じる父親、母親への援助（子育てにおける一つの

考え方として提示する等）に役立てたりすることができると考える。また、藤田・森口（2014）によると、児童と教師との間にも、親子関係における愛着関係に似た、愛着関係があるという。そのため、本研究において得られた結果をもとに、児童との関わり方を考えることで、児童が安定した愛着を持ち、他者とよりよい対人関係を築いていけるような、教師としての関わりができると考える。

## 6. 今後の課題

今後の課題としては、愛着スタイルに影響を与えるより多くの親子関係の側面に目を向け、その相関を見ていくことが挙げられる。親子関係は、本研究で取り上げた以外にも多くの側面を持つものである。さまざまな側面から、親子関係と愛着スタイルとの関係を見ることで、本研究においてはあまり相関が見られなかった、回避型愛着スタイルと親子関係の側面との関係や、男性と父親との関係において重要な親子関係の側面が見えてくると考える。また、今回のように、ある一時期のみを研究対象とするのではなく、複数の時期（児童期と青年期など）を研究対象としてその連続性を見たり、研究対象を特定の人物に絞って、その人物の成長を追いながら愛着関係を見たりといったような研究をしていく必要がある。そうすることで、愛着スタイルと親子関係との関係について、より具体的に検討することができるだろう。

## 参考文献

- Bowlby, J. 1988 *A Secure Base : Clinical Applications of Attachment Theory* (二木武 監訳 1993 『ボウルビィ 母と子のアタッチメント 心の安全基地』 医歯薬出版株式会社)
- 遠藤利彦 1992 『内的作業モデルと愛着の世代間伝達』 東京大学教育学部紀要 第32巻
- ヘネシー・澄子 2004 『子育てサポートブック ス 子を愛せない母 母を拒否する子』 株式会社 学研教育出版

- 藤田亜紀・森口佑介 2015 『児童期における教師に対するアタッチメント』上越教育大学研究紀要 第34巻
- 藤田文 2013 『子ども時代の身体接触と大学生の対人関係との関連』大分県立芸術文化短期大学研究紀要 第50巻
- 猪木省三 2010 『大学生の育児観及び対児感情に関する研究』県立広島大学人間文化学部紀要 5 37-43
- 井上俊哉 他 2005 『親子関係の生涯発達心理学的研究Ⅱ - PBI と IPA の尺度の再検討 -』東京家政大学研究紀要 第46集(1) pp.245~251
- 中尾達馬 2012 『愛着スタイル尺度における自己評定と他者評定の不一致が適応へ及ぼす影響』琉球大学教育学部紀要(80):225-234
- 大河原美以 2015 『子どもの感情コントロールと心理臨床』株式会社 日本評論社
- 岡田尊司 2011 『愛着障害 子ども時代を引きずる人々』株式会社 光文社
- Prior, V. & Glaser, D. 2006 *Understanding Attachment and Attachment Disorders*(加藤和生 監訳 2008 『愛着と愛着障害 理論と証拠にもとづいた理解・臨床・介入のためのガイドブック』(株)北大路書房) 詫摩武俊・戸田弘二 1988 『愛着理論からみた青年の対人態度 - 成人版愛着スタイル尺度作成の試み -』東京都立大学人文学部人文学報(196) p 1-16
- 酒井厚 2001 『青年期の愛着関係と就学前の母子関係 - 内的作業モデル尺度作成の試み』性格心理学研究 第9巻 第2号 59-70
- 菅原正和・伊藤由衣 2006 『児童期の母子関係が青年期の自我形成に及ぼす影響 - 自尊感情(Self Esteem)と対人不安を中心として -』岩手大学教育学部研究年報 第65巻 31~44
- 庄司順一 他 2008 『アタッチメント 子ども虐待・トラウマ・対象喪失・社会的養護をめぐって』株式会社赤石書店